

市民キュレーターワークショップレポート（平成 27 年度）

【レポート目次】

その 1	ワークショップスタート！	pp.1-4
その 2	市民キュレーターの紹介	pp.4-5
その 3	展示内容が決定しました	pp.5-6
その 4	中間発表をおこないました！	pp.6-8
その 5	展示作業をおこないました！	pp.8-12
その 6	ギャラリートーク	pp.13-16
その 7	トークイベント：市民とアートとの関係とは	pp.16-19
その 8	撤去作業・修了式	pp.19-21
感想	～ワークショップを終えて	pp.21-25

〈ワークショップスケジュール〉

平成 27 年
10 月 17 日
開講式・オリエンテーション
11 月 7 日
中間発表
12 月 13 日・14 日
展示作業
12 月 15～26 日
展覧会開催
12 月 23 日（展覧会期中）
市民キュレーターによる ギャラリートーク
12 月 27 日
撤去作業・修了式

〔展覧会名〕 あなたをうつす 5 つの鏡

—5 人の市民キュレーターによる 大阪府 20 世紀美術コレクション展—

その 1 ワorkshopスタート！

10 月 17 日（土曜日）、市民キュレーターワークショップがスタートしました。

この日は開講式とオリエンテーションが行われ、公募によって選ばれた市民キュレーター 5 名が、大阪府立江之子島文化芸術創造センター（enoco）4 階のライブラリーにて初の顔合わせとなりました。

はじめに市民キュレーターとスタッフの自己紹介を行いました。市民キュレーターの方には、簡単な自己紹介の後に「最近感動したアート体験」や「最近あった楽しかったこと」について話していただきました。

一言にアートといっても皆さん様々な向き合い方、楽しみ方をされており、自己紹介ながらそれぞれに刺激を受けたのではないのでしょうか。



次に、大阪新美術館建設準備室の菅谷研究主幹より開講のご挨拶がありました。

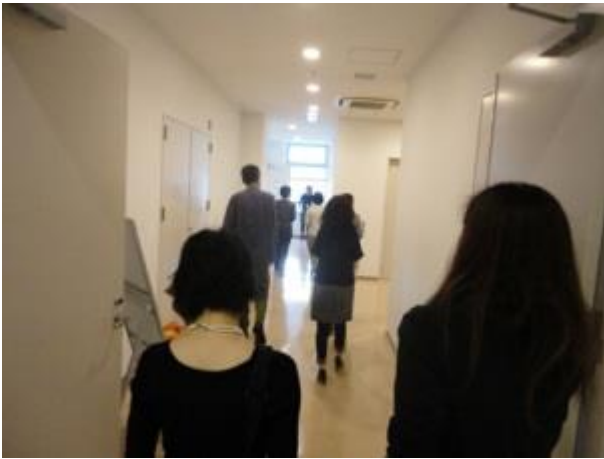
「美術への接し方は多様で、そのうちの一つが今回のワークショップ。見せる・作る側からのアプローチを知ることによってアートを楽しむ方も変わってくると思う。その過程を楽しんで。」

その後、大阪新美術館建設準備室の清原学芸員が昨年度の例をスライドショーで紹介。加えて先輩キュレーターがテーマ決定の経緯や展示の工夫など自身の体験を語ってくださいました。それぞれのキュレーターさんによって全く違う個性的な展示が出来上がっており、展示作品を選び展示方法を考える中で、自分を振り返ることや今まで知らなかった自分に出会えるというお話が印象的でした。

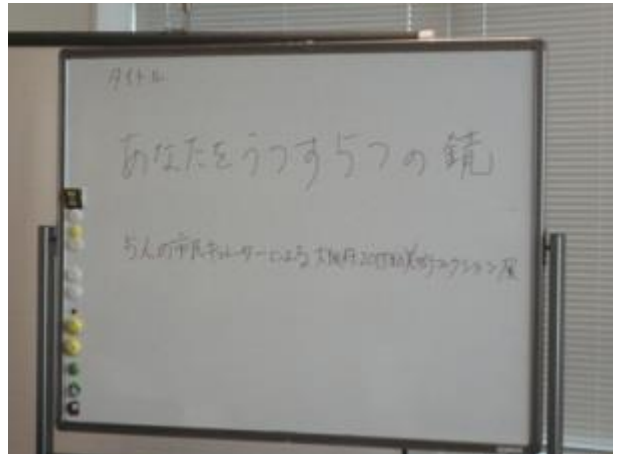
そして、大阪府文化・スポーツ課の中塚研究員から大阪府 20 世紀美術コレクションについてのレクチャーを受けました。絵画・版画・写真・彫刻など、様々なジャンルの作家やその作品について教えていただきました。



実際に展示を行う展示会場を見学した後、ライブラリーに戻ってじゃんけんで各スペースの担当を決定しました。ゴールとなる自分の展示空間が決まり、展覧会がより現実味を帯びてきました。



最後はこの日の大仕事。展覧会タイトルを決定しました。事前に市民キュレーターやスタッフから募った16個のタイトル案から1つに絞り込みます。実際にチラシなどの広報物に載ったときや、デザインのことも考慮にいれながら悪戦苦闘。最後はある一案を改良することで納得のものが出来上がりました。展覧会タイトルは、「あなたをうつす5つの鏡」。



今後のスケジュールなどの連絡のあと、会費制による自由参加の懇親会が行われました。enoco 館長おすすめの蜂蜜をドリンクに入れて堪能しながら談笑し、スタッフや先輩市民キュレーターも一緒に仲を深めました。



今後は中間発表までに個人で展覧会のコンセプトを固め、作品を選ぶ作業が始まります。しばらく個人作業が続きますが、一つのチームとしてどのような展覧会になるのか楽しみです。

(大阪新美術館建設準備室 インターンスタッフ 山田美和)

その2 市民キュレーターの紹介

これから展覧会づくりに取り組まれる、5名の「市民キュレーター」を紹介します。

岩城遥さん

今年4月に、男の子を出産しました。ほんの小さな赤ちゃんが、好奇心や欲求のままに行動する様子に刺激を受け、応募を決めました。展覧会へ行くのが好きで、関わりのある仕事をしたいと思ったこともあったので、このワークショップに参加できたことを本当に感謝しています。子どもから受けた刺激が、作品を通して、見ていただける方にも広がっていったら嬉しいなと思っています。



杉浦友子さん

現代アート好きなお気楽主婦です。趣味は美術館巡りや観劇など。瀬戸内国際芸術祭やアールブリュットを扱う滋賀のNOMAなども大好き。海外旅行の際もアート巡りは必須条件。

ゼロから色々なカタチを創り出す才能を羨ましく思うと共に、作品を観て感じることで、感性を刺激されることが楽しみです。

数々のアートに触れるうちに、その展示方法や構成にも興味が...そんな時に運良く出会ったのがこのワークショップ！美術館の裏側が覗けるなんてワクワクドキドキです。



西山佐和さん

大阪に嫁ぎまして4年目の主婦です。

私は独身の頃、近代の洋画家・児島善三郎氏の孫がオーナーをしている銀座のギャラリーに勤めていました。現在も芸術に触れることは趣味であり、心の栄養となっています。

こちらでの生活も少しずつ慣れてゆき、今は自分からもアクションをおこし、もっと大阪の人や街に溶け込んでいきたいと考えています。

今回の市民キュレーターワークショップがその第一歩になればと願っています！



武藤祐二さん

定年が近づいているサラリーマンです。ちょっと難解な現代アート、巧みな筆さばきの作品が並ぶ公募展、アートフェアなど、暇をみつけて展覧会を見えています。最近、街なかのアートプロジェクトにも関心を広げています。セミリタイア後は、若いころの夢だった美術関係に少しでもかかわれればと思っています。貴重な機会をいただいた今回、感激と同時に緊張しています。サラリーマンコレクターになったつもりで頑張ります。



森川佳奈さん

私にとって芸術とは、ドキドキしたり、癒しであったり、もっと知りたいと興味をそそられたり、はたまた心が痛くなったり、また明日も頑張ろうと元気をくれたり、恋愛のような存在です。いつも私が感じてきた「なにか」を少しでも共有できたら、と思い参加させていただきました。今回のキュレーションで、皆さんが恋に落ちるような、心になにか芽生えるような気持ちになっていただけたら光栄です。



市民キュレーターたちは目下、展覧会に向けて作品選びや展示テーマを見つけることに力を注いでいます。下の写真のように、学芸員と相談しながら、大阪府のコレクションから目当ての作品を探したり、展覧会プランを練ったりしています。

彼らがまず目ざすのは、11月7日（土曜日）の中間発表でのプレゼンテーション。ここで自分なりに固めたテーマを発表し合い、意見交換をしながらブラッシュアップをはかっていきます。

その3 展示内容が決定しました

11月7日（土曜日）の中間発表での展示プラン発表と意見交換によるブラッシュアップを経て、5人の市民キュレーターの展示内容が決定しました。（中間発表については、次回にレポートします）

・岩城遥さん

「赤ちゃんが見ている世界」

産まれたばかりの赤ちゃんは、ほとんど目が見えません。

ぼんやりと霧のかかったような状態です。

色の違いや、物の奥行も、わかりません。

しかし、1か月、2か月…と進むにつれて、徐々に、色、奥行、動きさえ捉えられるようになり、私たちが見ている世界に近づいていきます。

そんな短い間に起こる、赤ちゃんの視覚の劇的な発達を表現します。

・杉浦友子さん

「楽しんで 癒されたい ～感性を刺激する色と動物～」

スタイリッシュな五感を刺激する作品も好きだけど、今回はパワーを与えてくれる色たち、コミカルな動物たちを集めました。

現代ストレス社会に生きるみなさんも、是非こんな作品たちを、心を解放して眺めてみて下さい。色の持つパワーに触れると心が元気になります。お疲れモードの心には、赤の生命力あふれるパワーを～愛くるしいフォルムの動物たちからは笑顔と癒しを～感じるはず。

・西山佐和さん

「余白の時間」

選んだ作品と向き合い、思考し、なぜこの作品たちを展示したいのか？をもっと掘り下げていくうちに、私自身が時間に追われ、時間に使われている感覚があることに気づきました。

そんな時でも、いつでも心に余裕をもっていたい、心に余白のようなものをもっていられたいと願う自分がそこにはいました。

展示室にたたずみ、その時間、心や空間、作品から…皆様にもなにかの余白を感じていただけたら嬉しいです。

・武藤祐二さん

「シンプル ～作品は見る人によってできあがる～」

あなたは世の中の複雑さ、騒がしさにうんざりしていませんか。シンプルな作品ほど、いろいろな見方を受け入れてくれます。作者は何を言いたいのだろうか？と考える必要はありません。ただ、その色、絵肌（きめ）、絵の具の厚み……。それを味わってみてください。作品は生まれたときから作者の手を離れます。あなたと出会うことを待っています。静かに作品と向き合うとき、あなたの心に何かが生まれます。それもひとつの作品です。

・森川佳奈さん

「Hungry ? Come feed yourself ! ～腹ペコ？食べにいらっしやい～」

「食」をテーマにした世界を作りました。毎日必ず口にする「食」を「食べる」以外の角度から集めてみました。楽しい食卓が、どんなところから来て、どんなところへ繋がっているのか。「食べる」ことは舌だけで味わうだけではありません。食欲とは何なのか。満腹とはどういうことなのか。美味しいだけではない世界を、ぜひご賞味下さい。

その4 中間発表をおこないました！

11月7日（土）に、大阪府立江之子島文化芸術創造センターのライブラリーにて、市民キュレーターによる中間発表が行われました！ この日までに市民キュレーターの皆さんは、それぞれの展示テーマ、選出作品、その配置などを学芸員と話し合い決めてきました。

今回は先輩市民キュレーターの高崎さんと林さんもお越しいただきました。



市民キュレーターさんは、展示構成を記したマケットや平面図、展示内容をまとめたレジюмеなどを使い、ご自身のテーマへの思い・理由を発表しました。



皆さん、ご自身のテーマを明確にして展示内容をほぼ固めており、さらにそれが個性豊かであることに驚きました。発表も、それぞれの展示がイメージしやすい資料を持ってこられており、とてもわかりやすかったです。

市民キュレーターならではの、新しい展覧会となりそうな予感がしました。

皆さん発表後は、テーマをどのような作品や展示構成で表わすか？といった課題に直面されている印象を受けました。特に、つくりたい展示と実際の技術面でのギャップが生じる方、発表後の質問や感想タイムでの新しい意見に気づきがあった方は多いのではないのでしょうか。



先輩キュレーターさんも、中間発表は悩み、心をかき乱される時だとおっしゃっていました。と、同時に、充実した時間である、とも。市民キュレーターさんが様々な意見をうけどのように対応されるのか、その行く先によりさらなる独自性が生まれるのでは、と思います。

また、私が印象に残ったお話は「平面の作品の額縁の有無」についてです。すでにどこかで展示されている作品には額縁がついている場合があります、その大きさも配置を考える際に考慮しなければいけないこと。あるいは、額縁がないものは、つけるべきかない状態で展示するのか、つけるとしたら予算内でどのようなものに・・・？といったことを考えることもキュレーターの仕事なのだとわかりました。普段何気なく見ていた美術作品も、展示の際には様々な工夫、手間がかかります。市民キュレーターさんは今後、そういったことまで実際に体験されながら、美術とまっすぐ向き合っていくのだと感じました。

皆さんの発表が終わると、最後に展示方法や今後のスケジュールのお話、そして先輩キュレーターさんからの体験談やアドバイスを聴く時間になりました。

今後は作品の最終決定、キャプション作成などを行い、展示作業へと入ります。

先輩キュレーターの高崎さんからは、「実際は想像と違うこともあります。ほかの展覧会を見て展示の参考にするといいのではないのでしょうか。」というアドバイスを。林さんからは、「作品を展示し照明を当てると感動しました。中間発表からスケジュールがタイトになります。文の直しとか…でもそれも、いい経験になります。」というお言葉をいただきました。

次回はとうとう、展示作業に入ります！ 今からとてもワクワクしますね。

作業の様子も、随時レポートしていきます！

(大阪新美術館建設準備室 インターンスタッフ 本原暁菜)

その5 展示作業を行いました！

12月13日、14日の二日間に分けて展示作業を行いました！

今回は展示作業の様子をレポートします。

まずは作業前に一度全員で集まりあいさつをします。そして作品を扱いますので、装飾品などは外して注意深く丁寧に作業を行うことを心がけます。

はじめに展示する作品を、市民キュレーターさんの指定する壁へと振り分けていきます。この段階では梱包された状態ですが、梱包を解く時は作品の下にクッションや巻き段ボールを敷き、作品が直接床につかないようにします。



次に壁にたてかける、あるいは布団を敷きその上に作品を並べるなどして、壁に展示するときの作品の配置を決めていきます。市民キュレーターさんが指示をし、展示作業専門作業員が配置の寸法を測ります。壁に立てかけた作品は横一列に並ぶので、横の間隔をよくみます。一方布団上に並べた作品は横一列ではなく高さを変えて壁一面内の構成をするためなので、横の間隔だけでなく縦の間隔も重要になってきます。

杉浦さんは作品数の多い展示ですが、額縁のついた作品の大きさを予測できず、壁に収まらないという事が起こりました。杉浦さんが悩んだ結果、作品3点の展示をやめることになりました。また横一列の予定だった展示を上下2段にするなどにして解決していました。この時は、作業員や学芸員と相談されていましたが基本は一人で、時間をかけ悩んでいる様子でした。



配置が決まったら、実際に展示し、照明を当てます。展示は作業員が行います。水平器、メジャー等を駆使し作品の間隔や高さや傾きを測って、見た目を整えます。

森川さんの場合、短い時間の中でも、作品一点一点を綺麗に見える状態まで粘り強く指示を出していました。人がみて、疲れないか。作品が曲がっていないか。ストーリーを作れているのか、など考えているようでした。時間が足らず焦りが少し全員に出始めても、森川さんは諦めず貫こうとされていました。

布団に作品を並べたときも、学芸員から上下の高さや幅の大きさを指摘され、当初の予定の配置と変わらざるを得なくなりましたが、展示の際には作品同士の色味や関係性を考慮した配置になるよう工夫されていました。



作品展示がひと段落つくと、キャプションと各部屋の解説パネルの設置にとりかかります。キャプションやパネルなども展示空間の中で大切な要素なので、作品と同じように、市民キュレーターさんは学芸員と相談しながら見やすい位置に設置します。

武藤さんは、キャプションなしでの展示となっています。展覧会のリーフレットに記載しているため、部屋のテーマである「シンプル」を大事にするためにもキャプションを外されたそうです。情報を抑えたおかげで、作品自体のみを鑑賞し物体をより感じられる部屋となりました。展示において、何を重視し何を削るか、といったこともキュレーターの役割なのです。

西山さんの場合、ご自身が感じる余白というテーマを、作業日まで大切に温めていらっしゃいました。そのおかげか、説明パネルを設置するときも、「展覧会タイトルを一つの壁面に。余白をもって」といった指示をされていました。テーマを見なくとも配置のみで西山さんがおっしゃられる余白を感じられる工夫でした。



最後に、各部屋のコンセプトにあわせ、椅子やマット、展示の参考文献等を配置し、展示作業は完了です。

岩城さんは部屋のデコレーションと部屋の真ん中のマットや本などで、ご自身のテーマを、作品のみならず身近なものから連想させて親子が寄り添える部屋づくりをされていました。マット、本、そして一つの小さな靴が、白い壁の部屋の中で存在感を放ちそれ自体が作品のような見え方までします。



今回の展示作業で気づいたことは二つあり、まず事前準備の必要性です。展示には、手順をしっかり踏んでハプニングが起こらないように事前に予測すること、予測したものを用意する事などが必要だと感じました。

もうひとつは、作業内のある一場面で気づいた、今回のワークショップの効果です。岩城さんの部屋のマットを敷く時、マットはその場で組み立てるものだったので、手が空いていた杉浦さんも手伝い敷いていました。最後の仕上げだったのでそれぞれの疲労は垣間見えたのですが、とても自然に、同じ場で展覧会づくりを共有されていて、心地の良い時間となっていました。今回のワークショップは単に展覧会づくりの体験だけでなく、表現とコミュニケーションの場でもあると気づきました。

印象に残ったことは、市民キュレーターさんのこだわりです。

展覧会のタイトル「あなたをうつす5つの鏡」からうかがえるように、みなさんが“作品を見る側”＝“あなた”を意識したこだわりを持っているように感じました。

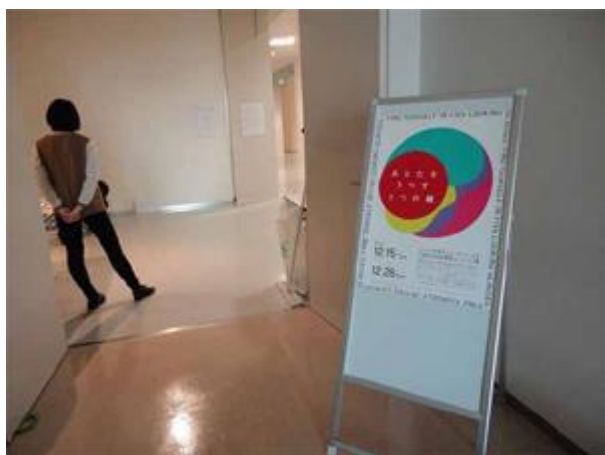


実際に展示された作品を見て、予想通りの空間になったという方もいらっしゃれば、予想とは違う色合いや展示になったけれど満足です、という方もいらっしゃいました。

五人が最後の展示まで力を注いでいたため、どの部屋も個性が際立つ展覧会場となりました。

また、入り口から入って左のスペースには、今までの市民キュレーターワークショップの紹介や、先輩キュレーターさんによる5回目を記念した特別企画の映像なども展示してあります。

会期も残りわずかですが、ぜひ足を運んでみてはいかがでしょうか？



(大阪新美術館建設準備室 インターンスタッフ 本原暁菜)

その6 ギャラリートーク

12月23日、「あなたをうつす5つの鏡」展覧会場にて、市民キュレーターさんによるギャラリートークがおこなわれました！

一人10分ほどお話いただきます。会場はおおよそ35名ほどのお客様で埋め尽くされさぞ緊張されたことと思いますが、皆さん丁寧に簡潔に、今回の活動と展覧会への思いを語りました。

杉浦さんの展示のテーマは「楽しんで癒されたい～完成を刺激する色と動物～」です。自分好みだという明るい色と、楽しい生き物のパワーがあふれる作品がそろっています。

作品のいくつかについて、その作品を選んだ理由を説明した後、テーマについて語りました。

また今回の体験を通して、「自分自身を日々キュレーションしている」ことに気づいたそうです。5人の市民キュレーターさんの展示にそれぞれ個性があり、作品を選んだ段階でその人自身が現れたのだと考えた杉浦さん。「ものを選ぶことはその人自身を表すこと」「さらけ出すことはこわいけれど、日々キュレーションをして自分を表している。自分自身を日々キュレーションしている」と話し、今回のワークショップ体験から自己表現について再確認していました。



岩城さんは「赤ちゃんが見ている世界」というテーマで展示しました。赤ちゃんの「目が見えてくる楽しさ」を感じてもらえるよう、作品には見る順番が設定されており、順を追って説明がなされました。工夫した点は「こども部屋っぽい展示になるように」壁に装飾を施した点。「ごちゃごちゃになったかな？と思ったけれど、楽しくできた」とお話ししていました。

今回のワークショップで気づいた点は、サイズや作品同士の距離感、間隔を考える大切さと、作品が常に万全の状態で保管されているわけではないということだそうです。展示したかった作品の状態が良くなり展示できる状態ではなかったことがあり、その時作品を大切にしようという気持ちを持ったと語っていました。



武藤さんはテーマ「シンプル～作品は見る人によってできあがる～」について、概要説明ののち、作品とむすびつけて語っていました。

作品一点一点を丁寧に説明している印象でした。5人の中でとくに作品数が少なく大きさのある作品を選んでいたので、遠くから見るだけではなく近くで質感を見たりなど、色んな見方の提案をしていました。

「作品を選ぶことで作家を知ることにつながった」とワークショップを振り返っていた武藤さん。ご自身のアートへの思い、活動について軽く述べた後、丁寧なあいさつでギャラリートークを終えました。



森川さんは、作品選び、展示構成、そしてテーマ「Hungry? Come feed yourself! ～腹ペコ? 食べにいらっしやい～」について話しました。

作品選びの時はお気に入りの写真を中心に選んだそうです。ブレストをかさね、壁をコラージュするように配置したのち、ひとつひとつの作品と、3面の壁それぞれを楽しめるよう工夫した、とのこと。展示のとき、作品の当初のイメージとのギャップに戸惑ったけれど、飾ってみると暖かく柔らかい色の作品と白黒の写真等の違いがよく見られてよかった、とお話ししていました。



西山さんはコンセプトから丁寧に、自身の体験なども含めつつ、作品を選んだ経緯を話していました。展示してみると作品からそれぞれ違った余白を感じるとのことで、「見る人が何か余白を感じ、ほっとしていただきたい」と語っていました。

今回のワークショップを通して、見る側から展覧会をつくる側になったことで、違う視点を持てたとのこと。また、ワークショップ内の課題や発表の機会があったことで、表現し言葉で伝えるむずかしさをより深く感じたそうです。



今回のギャラリートークは、限られた時間内でぎゅっと詰まった思いが届く、そんなお話ばかりでした。作品を展示するむずかしさと楽しさ、さらにワークショップを通して気づいたことを語っていただき、なるほど、と聞いていて気づかされるが多かったです。

特に印象に残っているのは、岩城さんの”作品を大切にしようという気持ちを持てた”というお話や、西山さんの”言葉で伝えるむずかしさ”のお話です。展覧会づくりを経験したからこそ感じられることではないでしょうか。

5人の市民キュレーターさんには、展覧会づくりをした立場から、美術の奥深さを伝えていただきました。ありがとうございました！

(大阪新美術館建設準備室 インターンスタッフ 本原暁菜)



その7 トークイベント：市民とアートとの関係とは

12月23日（水曜日）14時30分から、2階のRoom8にてトークイベントが行われました。テーマは「市民がアート事業を担うこととは？」

市民キュレーターワークショップも今年で五回目。これまでの振り返りと今後の発展に向け、同じく市民が主体的に参加するアートイベントの先駆例として木津川アート総合プロデューサーの佐藤啓子さんをお招きしました。



まず、大阪新美術館建設準備室の高柳学芸員から、2012年に始まった本ワークショップの振り返りがありました。市民キュレーター事業は多くの美術館・博物館で実施されており、美術館や学芸員に対する理解を深めるなどの成果が見られますが、参加者が学芸員の仕事を学ぶというスタンスではなく表現の場として参加するという、本ワークショップのような形は、おそらく全国でも珍しいもの。課題としては、展覧会の観覧者満足度や市民とともに美術館との関係を考える場づくりなどがあげられました。



「美術館」と「市民」の新しい関係をテーマに、江之子島文化芸術創造センターの高橋学芸員にもコレクション活用の視点から「市民キュレーターワークショップを通じて、大阪府がどのようなコレクションを持っているのか一般の方々に知っていただけるようになった。知ることによって愛着を持つことができ、身近な存在になれる。」とお話がありました。



そして、いよいよ佐藤さんのお話がスタート。





木津川アートとは、京都府木津川市誕生から3年が経過したことを受けて、市の魅力や文化を市内外に発信することと併せ、市民が自分達の住むまちを見つめなおすきっかけづくりとして、2010年に始まった地域型芸術祭。アーティストは学芸員などの審査による公募で選ばれ、第4回（2014年開催）からは、1年目で地元住民と信頼関係を築き2年目で実際に芸術祭を作るというサイクルで、2年で1つのプロジェクトをじっくりつくりあげています。

総合プロデューサーの佐藤さんの主な仕事は、たとえ実現が厳しくても、選ばれた作家のやりたいことを応援し、作家と地元の人々、アートと場をつなぐ橋渡しをすること。地元の市民ボランティア「見守り隊・豚汁隊・お掃除隊」とともに活動されています。その中で佐藤さんが出会ったたくさんの楽しいエピソードも時間いっぱい話して下さいました。

また、佐藤さんが「町生かし」に目覚めるまでの経緯もお聞きしました。旅先のイギリスで、その地域の良いところ・今ある町並みを生かして楽しむシステムに刺激を受け、感動の場を作りたいという思いが芽生えたそうです。

では佐藤さんにとって市民がアート事業を担うこととはどういうことなのか。企画とはクリエイティブな行為であり、作家の苦悩や努力を感じて展示を行うのがプロ。キャリアはないがプロよりも自由に動くことができ、純粋に楽しめるのが市民。また感情を表現する場を求める市民にその機会を提供することでは社会貢献につながるのでは、と仰っていました。

休憩をはさみ、その後参加者の皆さんに書いていただいた感想などからフリートークへ。今後の木津川アートの展望、地域と作家のコーディネート秘訣、美術館のあり方から大阪のアートシーンまで様々な話題で盛り上がり、本日のトークイベントは無事幕を閉じました。



今回のイベントで初めて木津川アートの事を知った私でしたが、佐藤さんのお話の中で特に印象的だったのは、アートには人と人との繋がりが欠かせないということです。木津川アートの成功も地元のボランティアの理解や支えがあってこそ。学芸員にとっても、作品や作家について伝えるだけでなく、アートと市民が繋がる場所を提供するのも大切な仕事だと感じました。まだまだ敷居の高いアートと市民をどのように結び付けていくかは難しいところですが、その可能性は人の数だけ町の数だけ残されているのではないかと思います。トークイベントでした。

(大阪新美術館建設準備室 インターンスタッフ 山田美和)

その 8 撤去作業・修了式

12月27日（日曜日）午前10時より、撤去作業を行いました。



美術品取扱専門作業員と共に、手分けして作品を壁から外していきます。大きな作品はプロの仕事に任せますが、その他のことは出来る限り市民キュレーターさん自ら行いました。



ペンチで釘抜き、大きな脚立に登ってのワイヤー外し、キャプション撤去、作品梱包など……。これまでで培ってきたチームワークを生かして、協力して作業しました。外は厳しい寒さでしたが、身体を動かすとぽかぽかするねとの声も上がるほど市民キュレーターさんたちが積極的に動いたおかげもあってか、作業は予定より早く終了しました。



その後、市民キュレーターさんたちは4階ライブラリーに集合。簡単ながら修了式が行われました。「作品の安全や見せ方、チラシなど隅々まで気を使わねばならないのは大変だが貴重な体験だった」「ギャラリートークの日はたくさんの人に見てもらうことで作品が輝いているように感じた」「絵の力、存在感がわかって面白かった」など、一人ずつこのワークショップを終えての感想を述べ合いました。



こうして、市民キュレーターの方々にはこの後もレポート作成が残るものの、無事今回の「市民キュレーターワークショップ」は閉講となりました。

それまで何の経験もない人がたった2カ月でゼロから一つの展覧会を作り上げるというのは非常に大変だったと思います。しかし嬉しいことに、市民キュレーターのほとんどの皆さんが今後の新たな一歩へと前向きな言葉を述べておられました。作品を選び表現に悩んで自分を見つめなおすことで、それぞれに合ったアートとの向き合い方を考える良い機会になったのではないかと思います。長くて短いこの2カ月間、皆さん本当にお疲れさまでした。

(大阪新美術館建設準備室 インターンスタッフ 山田美和)

感想～ワークショップを終えて

◇岩城遥さん

この展示は、とても大きなチャレンジでした。0歳の子どもがいる中、十分にやれるだろうかと不安ながらの応募でした。しかし、結果として、本当に素晴らしい経験ができました。

特に感じたことは2つありました。

まず、自分の思いを表現する楽しさを知ることができました。構想を練ることやそのための勉強、小道具の準備、どれも楽しく、完成した空間を見た時は幸せな気持ちになりました。

もう1つに、展覧会やアートをやってみたいと思ったら、どんな人でもできるんじゃないかなと考えるようになりました。これまでは、美術を習う人や仕事にしている人だけがするものと思っていました。知らないことが多過ぎ、難しく考えていた気がします。今回の展覧会ができたのは、学芸員や施設のみなさんのおかげですが、もし今後、何かやってみたいと思った時には、以前よりずっと気軽にアートに



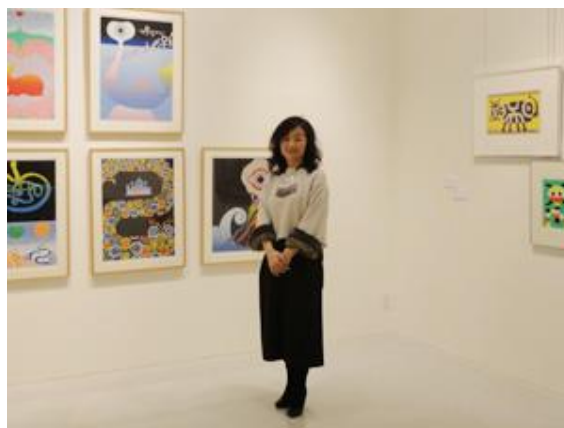
関われる気がしていて、それが自分でもとても楽しみに感じています。

私の生活を大きく広げてくれた経験だったと思います。機会をいただけて、最高にラッキーでした。本当に感謝しています。

◇杉浦友子さん

初めは小さな図録から自分の感性に響いたものを選ぶ〜という作業で、カーテンの生地を小さな見本帖から選ぶ感覚に似ていて、イマイチ実際の展示雰囲気のイメージが湧かずにかなり戸惑いました。

それが、作品搬入日に実物と初顔合わせ。ジャジャーン！迫力が。色合いが。質感が。違う違う！まるで違う！そして出来上がった自分の空間があまりに自分好みで可愛くて、「ここに住みたい！」と。お気に入りに囲まれて至福の時でした。それと同時に自分が丸裸になった様で恥ずかしくもありました（笑）



選ぶという行為は「自分らしさを表現するということ」だと気付いたのも大きな収穫。アートに限らず、本棚であったり食器類であったり……

そこには自分の選んだお気に入りのたちが集められてるはずです。日常の日々がキュレーションなんだなあ〜と。

こんな素敵な機会を与えて下さった関係者各位に心より感謝致します。今回の様なアートに関わるワークショップはずっと続いて欲しいです。更に多くの市民がアートを身近に感じて楽しみ、大阪の街も文化も豊かに彩られること！期待しています。

◇西山佐和さん

展覧会を終えてみればあっという間で、今はぽっかり穴が開いたような感覚すらあります。充実した3ヶ月間でした。

思い返せば、コレクションカタログを広げ、作品を選ぶ時の楽しさ、その選んだ作品と初めて対面する時のワクワク感を忘れることはできません。

途中、迷いも生じました。テーマである「余白」が伝わりにくいとのご意見を受け、悩み、テーマ変えも考えました。学芸員の方々のアドバイスを受け、私が本

来伝えたいものを追求し、作品と向き合い突き進み、今は貫いてよかったと思っています。

今回のワークショップで、表現し伝えることの難しさ、言葉の力をより深く考え、学ばさせていただきました。そして私はアートが好きで、これからも関わっていきたくと改めて感じています。

この貴重な機会を与えてくださったこと、関わってくださった皆様に心から感謝を申し上げます。ありがとうございました！



◇武藤祐二さん

展覧会を作ること（キュレーション）は、ある意味で自己表現です。自分が伝えたい内容を良く練ることが最も大切ですが、いかに伝えるかに腐心することも同じぐらい重要だと感じました。例えば、告知フライヤーや、会場の説明パネルの文章、ハンドアウトなどにも、見やすさや読みやすさといった観点で熟慮しました。

また、作品のレイアウトも重要な表現要素です。そこで、マケットを作成して検討しました。もちろん、作品の搬入から搬出までの安全などにも細心の注意を払わなくてはなりません。それだけに、選んだ作品との出会いは感激ひとしおです。私は大きな作品を選んだこともあり、その迫力に圧倒されました。

市民キュレーターワークショップは、展覧会の裏側を体験できる、めったにない機会でした。お世話いただいた学芸員、スタッフの皆さま、そして、展示をご覧いただいた、トークをお聞きいただいた市民の皆様に、心から感謝申し上げます。



◇森川佳奈さん

市民キュレーターワークショップは本当に楽しい時間でした。

本当のキュレーターとの意味とは異なり、市民キュレーターが自分を表現させて頂ける、稀にみる展覧会だったと思います。

企画から始まり、作品を選び、展示の仕方などを通して、自分の伝えたいことをどう見せるかという事を少しずつ体験させて頂きました。

想像したことを創造する難しさを身を持って感じました。



しかし、学芸員さんのサポートもあり、自分だけでは思いつかなかったアイデアを頂いたり、私の想像力が膨らむように進めて頂けたので、大変ではありましたが、スムーズに準備ができました。

その他、たくさんのご関係者の方々からのアドバイスやご意見を頂き、自分だけでは見えなかった展覧会の裏側を体験することができました。

今後、美術館などに行く際には、今までとは違った見方でアートと接していくと思います。

（実際、ワークショップ中に展覧会に行きましたが、今までとは違うことを考えながら観覧していました）

展示作品、enoco、ワークショップご関係者、ご来場頂いたみなさま、どれひとつ欠けても出来上がらなかった展覧会。

このような経験をさせて頂けて、感謝しております。
みなさま、ありがとうございました。

スタッフより

◇高橋真理子（大阪府立江之子島文化芸術創造センター 企画部門 アートコーディネーター）

今回で5回目となった市民キュレーターワークショップ。私は、初回の平成24年度、2回目の平成25年度を担当しました。今回は久しぶりに担当となり、5回目となった本事業が、変化したところ、また変わらないところもよく分かったように思います。

初回では、ワークショップがメインであり、展覧会自体はあまり重要なポジションとされていませんでした。しかし、平成26年度のワークショップより、展覧会タイトルをみなで決め、展覧会チラシもプロのデザイナーさんをお願いすることで、より「展覧会」としての強度が増したように感じました。

今回のワークショップでも、様々なバックグラウンドをもった、美術を愛する方達が参加をしてくださいました。それぞれに普段している美術との付き合い方とは、また違った体験が出来たのではないのでしょうか。

本事業での経験をもとに、今後、さらなるコレクションの新たな活用方法を模索していけたら考えています。

◇清原佐知子（大阪新美術館建設準備室 学芸員）

市民キュレーターのみなさん、約2か月半のワークショップを完走されて、お疲れ様でした。限られた時間で盛り沢山の課題に取り組まれ、また季節柄、体調管理にも気を抜けない状況で、最後まで熱意を絶やさず、素晴らしい展示を完成されたことを、大変嬉しく、ありがたく思います。みなさんそれぞれに個性の際立った、実にバラエティーに富んだ展示になりました。この体験が、アートに触れる楽しみをより一層深め、生活により多くの彩りをもたらす一助となれば幸いです。

市民キュレーターの方々との交流は、私たちにも新鮮な風を吹き込んでくれます。展覧会づくりという新しい出来事に初めて向き合い、好奇心に目を輝かせ、実現したいプランや進みたい方向について熱心に語られる姿に接するたび、私もまた、この仕事の原点というべきアートへの愛やモノを作り上げるワクワク感を忘れるまいとの気持ちになります。自分自身にとっても大変ありがたい貴重な機会です。

今回のワークショップをもって、26人の市民キュレーターが誕生しました。先輩キュレーターの層も厚くなり、今回も応援やアドバイスなど様々な場面でお力添えをいただきました。改めて感謝いたします。

◇高柳有紀子（大阪新美術館建設準備室 学芸員）

今回は、市民キュレーターワークショップの意義は何なのか、客観的に捉えることを意識しながら取り組みました。参加者の自己満足で終始してはいけないし、かといって美術館側の常識を押し付けるようなものであってはいけない。どこが最良の着地点なのか、毎回のことですがとても悩みました。今回の市民キュレーターの方々も、特別企画に参加してくれた先輩市民キュレーターのみなさんも、圧倒されるほどの熱意をもって取り組んでくれました。担当者としてそれを最大限に生かせたのか、今でも自問自答しています。ただ一つ確実に言えることは、アートも刺激的だけど、アートを愛する人たちもと

でも刺激的。そんな人たちと一緒に何かできるのは、とても面白いということです。どうか、これまで参加されたみなさんが、アートを語り、行動し、周囲に影響を与え続けてくれることを期待しています。

◇本原暁菜（大阪新美術館建設準備室 インターンスタッフ）

初めて市民キュレーターの方々とお会いしたとき、わくわくした気持ちでいっぱいでした。キュレーターという専門性の高い役を担う市民の方が、いったいどのような展覧会をつくりあげていくのか、とても興味が湧いたからです。中間発表で5人の部屋のテーマや展開を聞き、それぞれが確立した独自のテーマで作品を選び展示を考えており、ますます実際の展覧会が待ち遠しくなりました。展覧会が始まると、ひとつひとつの部屋が個性的で、さらに、展示されている作品に興味を持つような展示でした。はじめの気持ちからかわらず、最後まで関われたことがとてもありがたかったです。

長期間少人数の方とワークショップをして成果を発表する機会はなかなかなく、今回のインターンシップはとても深い学びとなりました。展覧会づくりの一部始終をみて展覧会そのものの知識も増えましたが、作品を通してコミュニケーションをとる喜びを知ったことが1番の収穫です。

ありがとうございました。

◇山田美和（大阪新美術館建設準備室 インターンスタッフ）

この度は、美術館の教育普及活動に興味を持ち、外部研修生という立場でワークショップに参加いたしました。

展覧会作りを裏方としてお手伝いさせていただき、実務もさることながら、アートを生業にする方や同じく興味関心のある方々と接して刺激を受けました。私自身至らない点ばかりでしたが、このような機会を頂けたことに感謝しています。

そして、ワークショップを通してアートに対する考え方が変化しました。市民キュレーターOBの方が企画したライブや銅板作家さんへのインタビューに同行させていただいて、アートとの接し方は人それぞれ自由であることを肌で感じました。そして何より、美術館には敷居が高く近寄りがたいイメージが付きまといますが、アート自体は人と人との繋がりが欠かせない温もりあるものであることが大きな発見でした。この展覧会も様々な人々の協力のおかげで成り立っていますし、トークイベントに登場した木津川アートプロジェクトのお話が強く印象に残っています。

振り返るとあっという間に終わってしまい寂しいかぎりですが、今回のワークショップでの経験を今後に生かしてまた新しい一歩につなげたいと思います。